相模経済新聞　2019年6月10日号

宇宙生命哲学 ことはじめ 14

北里環境科学センター理事長／宇宙生命哲学者 伊藤 俊洋

ヒッチコックの「鳥」

もう56年も前のことである。1963年、大学4年生の夏、銀座でヒッチコックの「鳥」を観た。夜中に、湖畔の一軒家を襲う鳥の群れの恐怖は、筆舌に尽くし難いものがあった。カラスやカモメが人を襲う情景の撮影技術に度肝を抜かれた。まだCGなどの先端技術がない時代で、キャメラや編集技術の優秀さに舌を巻いた。

それにしても、ヒッチコックは、何故このような世紀末的な映画を撮ったのだろう。当時の映画評はあまり芳しくなく、むしろ悪評が目立った。それまでのヒッチコックに対する評価は絶大で、ミステリーを撮らせたら、この世界で右に出る者はいないと言われていた。さすがのヒッチコックも種切れで、グロテスクな動物パニック映画に落ちぶれてしまったのかとの声も聞かれた。1980年に、英国王室からナイトの称号を送られ、その年に80歳の生涯を閉じた。

私は、今、地球環境問題の解決策を、「宇宙生命哲学」という概念に求めている。地球上では、全ての生物が運命共同体であり、同一の環境を共有しながら循環している。人類、哺乳類、鳥類、魚類、両生類、爬虫類などの動物、そして、植物も微生物も みんなかけがえのない仲間で、この仲間たちと上手に折り合いをつけて仲良くして行かないと、地球上で健全な生命世界は続かない。

仲睦まじく語らうハシブトカラス（著者撮影）

春になると花が咲き、昆虫が自由奔放に飛翔し、小動物が恋を囁き、両生類が水辺に群れる環境で、鳥たちも我が世の春を謳歌できる。1950～60年代には、人類が作り出した農薬で昆虫から小動物まで壊滅的な打撃を受け、野の花も受粉できなくなり、環境は、瞬く間に死の世界へと雪崩れて行った。1962年には、環境学者のレイチェル・カーソンが「沈黙の春」を出版している。

最近、リバイバル番組で、「鳥」を見る機会があった。そして、全く突然に謎が解けた。この映画は、環境問題を取り上げていたのだ。ヒッチコックは「沈黙の春」の恐怖を、「鳥」の中で叫んでいたのではないか。もしそうなら、「鳥」は、映画史を超えて、文明史上でも最高の芸術作品の一つと評価しても良いだろう。

ヒッチコックのことだから、天国でも「鈍いやつらだ」と、ほくそ笑んでいるような気がする。